

九州大学宮崎演習林の地名

椎葉, 康喜
九州大学農学部附属演習林

内海, 泰弘
九州大学農学部附属演習林

<https://doi.org/10.15017/17053>

出版情報 : 九州大学農学部演習林報告. 90, pp.99-111, 2009-03. 九州大学農学部附属演習林
バージョン :
権利関係 :

資 料

九州大学宮崎演習林の地名*

権 葉 康 喜**・内 海 泰 弘**

抄 録

九州大学農学部附属演習林宮崎演習林にはその設立以前から様々な人々が生活の場として活用されてきた歴史があり、長い時間の中で多くの地名が付されてきた。これらの地名は現在でも教育・研究活動や森林管理業務などに活用されている。地名があることで林班や小班といった一定の広がりを持つ指標では説明が困難な「点や線」としての位置説明が可能になり、踏査や現場の状況説明が容易となる。しかし1939年の宮崎演習林設立以来、地名に関するまとまった記載はこれまで存在していない。地名に詳しい年長者達が少なくなり、教職員や関係者の異動などが以前と比べて多くなったため、これまで口承されてきた地名が年々消失してしまう可能性が危惧されている。そこで本報告では現在使われている地名に加えて、以前使われていた地名についても関係者に聞き取り調査を行い、宮崎演習林内に在する92の地名についてその由来とともに記載した。

キーワード：宮崎演習林，地名，由来，データベース

1. はじめに

地名はその地域に生活する人々の場所に対する定義であり、その中には様々な歴史的背景を内包しているものも少なくない。九州大学農学部附属宮崎演習林（以下、宮崎演習林）内にも多くの地名が存在しているが、これらの名は宮崎演習林が設立された1939年以前に付けられたものがほとんどである。つまりこれらの地名は宮崎演習林が所在する宮崎県椎葉村大河内地区の歴史の一部の反映であるともいえる。

宮崎演習林内の地名には、山や沢といった地形図に反映しやすいものだけでなく、炭焼き跡や旧居住地といった地図上では明確に読み取れないが現場に行くと確かに茶碗のかけらや石積が往時を偲ばせるものなどがあり、宮崎演習林内での位置を表現する時に現場や机上で重用されてきた。宮崎演習林はその管理の便宜を図るため36林班に区分され、それぞれがさらに小班に分けられているものの、たとえば「32林班に接する30林班い小班の一部」と表現するよりも「アオキデーラ」と伝えた方が地名を知っているもの同士では理解が早いことは明らかである。

* Yasuki SHIIBA and Yasuhiro UTSUMI : Geographical names of Shiiba Research Forest, Kyushu University

** 九州大学農学部附属演習林

Kyushu University Forests, Kyushu University, Japan

このように演習林における教育、研究、管理業務に利用され、時には様々な防災対応や災害時の情報収集などに利用されている地名は、これまで口承されているものの、そのほとんどが文書情報として記載されてこなかった。近年、地名やその由来に詳しい地域の年長者の方々が少なくなり、加えて教職員や関係者の異動が頻繁に起きるようになったことで、過去には一般的だった地名が、語り継がれることなく消失する可能性が生じてきた。

地名の消失はそれに伴う歴史の消失につながる。宮崎演習林設立以前から伝えられてきた地名の保存は長期的な視点を必要とする森林管理に不可欠である。そこで本報告では、大河内地区に言い伝えられている宮崎演習林内の地名を現在頻繁に使用されているものだけでなく、過去に使用されていたが近年使われなくなったものも含めて記載することを目的とした。本調査に当たっては当地区で生まれ育った複数の年長者の方々に聞き取り調査を行い、著者の一人である権葉がこれまでに蓄積してきた資料と照合して取りまとめた。

2. 記 載 方 法

宮崎演習林内の地名とその由来について、権葉が少年期であった1950年代以降に地域の長老の方々から聞いた話と、宮崎演習林に雇用された1967年より大河内出身者である職員や日々雇用者の方々から伺って得た情報を基礎として記述した。同時に権葉の両親、祖父をはじめとする親族や大河内地区出身の友人達との長年にわたるやりとりを参考にした。地図資料としては宮崎演習林発行の宮崎演習林2万分の1図(1982年発行)、宮崎演習林5千分の1図(1970年発行)および国土地理院発行の5万分の1図(1990年発行)を参考にした。文献資料については宮崎演習林50年のあゆみ(1989)、権葉村史(1994)、九州大学演習林九十年史(2002)、宮崎演習林造林台帳を利用して地名の由来を照合した。抽出した地名について、権葉村大字大河内で生まれ育った76歳から91歳までの男性3名と女性1名の方々に2008年9月16日、9月18日、9月26日に聞き取り調査を行った。その中で確証が得られた地名を記載し、いくつかの由来については詳述した。

3. 地 名 と 由 来

以下に宮崎演習林の地名を各区域ごとに示す。なお当地区では呼称されていないが国土地理院地図に記載されている地名には(国)を、かつては使用されていたが、現在では呼称されていない地名には(旧)を付した。

3.1 津野岳団地(1-8林班, 図1)

3.1.1 山名

三角点津野(国): 2林班の頂点で民有地に接する。標高1436.9m。



Fig.1 Geographic names of Tsunodake area

図1 津野岳団地 (1-8林班) の地名

津野岳 (江代山), 山頂三角点都野岳 (国): 3, 4 林班の頂点で民有地に接する。標高 1606.7m.

馬口岳, 三角点馬口 (国): 7 林班の頂点で民有地に接する。標高1435.8m.

3.1.2 谷, 川名

サカイダニ (境谷): 1 林班の一部と民有地との境界。矢立川の支流。宮崎県椎葉村と熊本県水上村の境界になる谷のため名が付いたという。

イワヤダニ (岩や谷): 2, 3 林班。矢立川の支流。谷の中に直径、高さとも 3 m 前後の大きな岩が点在していることから名が付いたとの話がある。

センツキダニ: 4 林班。矢立川の支流。

オオゴシダニ (大越谷) (旧): 4 林班。センツキダニの支流。近くに大越越という峠があり、この一帯が大越という地名で呼ばれているために付けられたそうである。

ゴヂュウヂダニ (五十字谷): 5 林班と 7 林班との境界。板谷川の支流。

キワダガワ (旧): 7 林班。ゴヂュウヂダニの支流。以前この近辺にはキハダ (当地域ではキワダと呼ぶ) の木が多くあり、この樹皮を採取するために住んだ山師が名付けたという。

3.1.3 その他の地名

焼き畑跡（旧）：1林班。津野岳団地ではもっとも古く当演習林全体でも2番目となるスギ人工造林が行われた。地拵には火入れを用い、スギの苗木を植付けした後にヒエを播いたので名が付いた。

岩屋小屋：2林班。津野岳に登る歩道沿いに雨宿りが出来る大きな岩があり、この付近での炭焼きや育林作業の際に、この岩を利用して泊まり込んで作業をしたという。

ジュンタロウガマアト（旧）：3林班。この地にあった炭焼き窯の持ち主の名から取ったという。

岩茸岩：3林班。イワタケは地衣類に分類されるためキノコではないが食用となる。成長が遅く急峻な場所に生育する。岩茸岩は演習林内でイワタケが唯一生える岩であるという。

オオコシゴシ（大越越）：4、5林班界の下端に位置し民有地と接する峠。当地区ではコシは峠を意味する。1943年頃にここを通る歩道を改修して車道が作られたが、現在は使われていない。以前はこの地点を境に矢立地区と合戦原地区を区分していた。

モミノキコバ（樅の木こば）（旧）：4林班。演習林設林以前から現在に至るまでモミが多く生育する。コバはこの地区の言葉で「畑、または焼き畑」を意味する。

サクラノコシ（桜の越）（旧）：4林班。峠の周辺に山桜が多かったため名が付いた。

キワダ小屋（旧）：5林班。キハダの皮を採取するために山師が住んでいた小屋があったという。

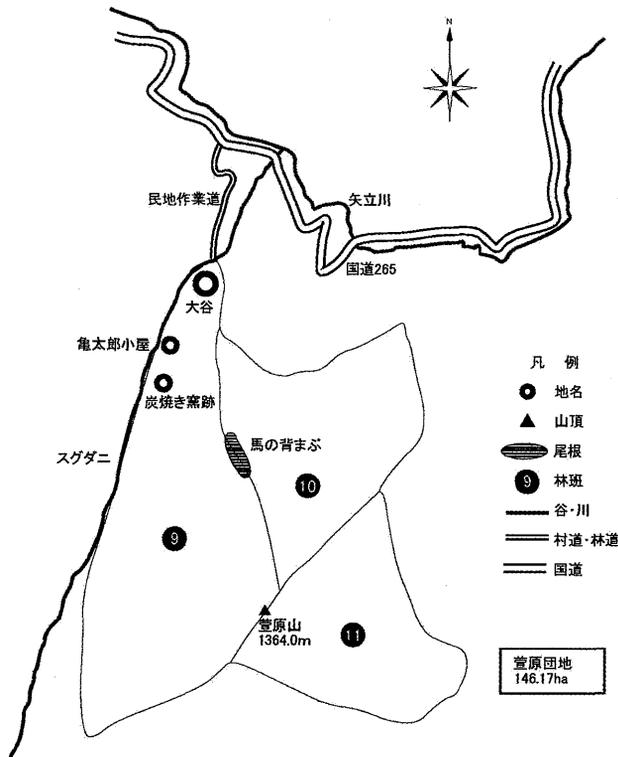


Fig.2 Geographic names of Kayahara area

図2 萱原団地(9-11林班)の地名

めぐり石：6林班。境界の維持管理などのときに、境界上にあるこの大きな石を迂回しなければ通れないので名が付いたそうである。

イデクチ（井出口）（旧）：6林班。イデとは谷から山の水田に水をひく水路を意味し、この付近が水の取り口であった。このイデの途中には水量を調整する堰があった。

炭焼き窯跡（旧）：2，6林班。津野岳団地の人工造林が始まった1943年から太平洋戦後の1950年まで本演が各所で木炭を生産していた。

3.2 萱原団地（9—11林班，図2）

3.2.1 山名

萱原山：9，11林班の頂点。標高1364.0m。

3.2.2 谷，川名

スグダニ（直谷）：9林班の一部と民有地との境界。矢立川の支流。急勾配でほとんど蛇行していないため名が付いたという。

3.2.3 その他の地名

大谷：9林班。国道388号線から萱原山への歩道の登り口周辺（民有地）から9林班入り口の標高850m付近までを呼んでいた。

亀太郎小屋（旧）：9林班。萱原山山頂への歩道を少し登ったところに亀太郎という炭焼き山師が小屋を建てたことからこの名が残ったという。歩道沿いに小屋跡が残っている。

炭焼き窯跡：9林班。亀太郎という人が炭を焼いていたという。炭焼き窯跡がある。

ウマノセマブ（馬の背まぶ）（旧）：9，10林班界。城集落や野地集落，三方岳方面からこの尾根（当地区では「まぶ」）を遠望すると馬の背によく似ていることから呼ばれたそうである。

3.3 三方岳団地・大藪（12—18林班，図3）

3.3.1 山名

樋口山，三角点大藪（国）：12，13，14林班の頂点で，民有地と接する。標高1434.6m。

3.3.2 谷，川名

ヒノクチダニ（樋口谷）：12林班の一部と民有地との境界。大藪川の支流。

イワヤノタニ（旧）：12林班。ヒノクチダニの支流。

カラタニ（旧）：12林班。ヒノクチダニの支流。この谷は梅雨期に水が流れる程度で、冬にはほとんど水がないことから。

クミコウダニ：14林班。スノクチダニの支流。

フルゴエノタニ（旧）：14林班。スノクチダニの支流。

スノクチダニ（巢の口谷）：13，14，15林班。大藪川の支流。

クエノカワラノタニ：15林班。スノクチダニの支流。クエとは当地区では山地崩壊や、土石流のことをいう。カワラを川原または河原と解し、この谷に大きな崩壊があった後に名

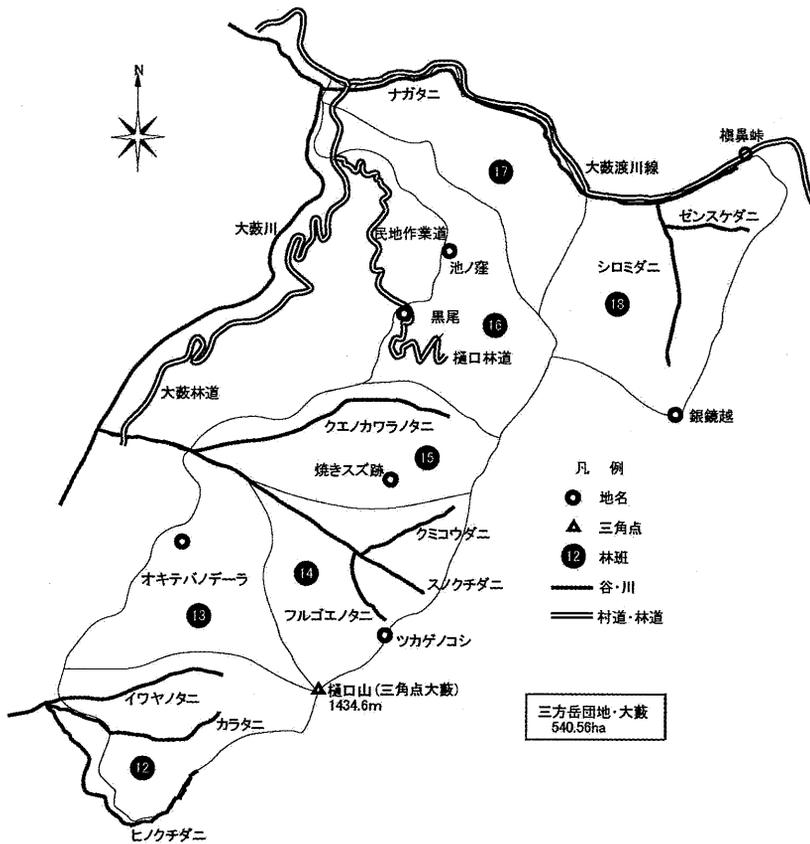


Fig.3 Geographic names of Oyabu area

図3 三方岳団地・大藪（12-18林班）の地名

付けられたのではとする話がある。

ナガタニ（長谷）：17、18林班と19林班の境界。大藪川の支流。古来椎葉村大河内と旧南郷村神門（現、美郷町）を結ぶ生活の幹線歩道があり、1973年より峰越し連絡林道（大藪渡川線）に改修された。

シロミダニ（銀鏡谷）：18林班。ナガタニの支流。村境を超え旧東米良村（現、西都市）の銀鏡集落へ通じる歩道があったことから。現在は猟師達の行き交う歩道となっている。

ゼンスケダニ（善助谷）（旧）：18林班。シロミダニの支流。

3.3.3 その他の地名

オキテバノデーラ：13林班。デーラは平地を意味する。付近は広い緩傾斜地となっており、大藪集落の先人達が焼き畑を行い、ヒエやアズキを作付けしたところである。その時に植えられたと思われるスギが数本あり、2008年時点で胸高直径が100cmを超えている。

焼きスズ跡（旧）：15林班。14、15林班界尾根の15林班側の斜面に山火事が起こり、スズタケがきれいに焼失したと伝えられている。

ツカゲノコシ (旧)：14林班内で民有地との境界付近。以前は前述の銀鏡集落や西米良村方面へ狩猟に行く際に狩猟人達の踏み付けた峠越しの歩道があった。峠にはイノシシの牙で切られて死んだ2頭の狩猟犬の名を猟師が刻んだ石が今も置かれている。

池の窪：16林班。冬でも水量が多いため水が留まり、時にイノシシのヌタ場（イノシシの身体に付いたダニなどを落とす泥水たまり）となっている。

黒尾：16林班。樋ノ口林道入口の造林地周辺をいう。

旗鼻峠：18林班界と檜葉国有林との境界。ナガタニを登り詰めた峠。

シロミゴシ（銀鏡越）(旧)：18林班と民有地との境界、シロミダニを登り詰めた峠。

ヒガシゴウ（東川）(旧)：17, 18林班全域。3.4.3参照。

3.4 三方岳団地・広野（19—31林班，図4）

3.4.1 山名

三角点横の花（国）：19林班の頂点で民有地と接する。標高1228.8m

三方岳，三角点三方（国）：21, 31林班の頂点で民有地と接する。標高1479.0m。

三角点城（国）：26, 28林班の頂点で民有地と接する。標高1303.4m。

広野山：28林班の頂点で民有地と接する。標高1271.0m。

3.4.2 谷，川名

ナガタニ（長谷）：17, 18林班と19林班の境界。3.3.2を参照。

シロイシダニ（白石谷）(旧)：19林班内，ナガタニの支流。

クラトコダニ（暗床谷）：20林班。ナガタニの支流。大規模な伐採のために人々が入林した当時、谷には木立が鬱蒼と生い茂っていて昼間でも薄暗く不気味であったことから名が付いたといわれている。

ノグルノタニ：20林班。ナガタニの支流。

ジャダニ（蛇谷）：21林班。大藪川の支流。昔大蛇がいたという話もある。

大藪川：22～29林班。本流。

イタバシノタニ（板橋の谷）：23林班。大藪川の支流。大規模な伐採が行われた時代に木挽きによって製材された材を乾燥させるイタホシバ（板乾場）がこの付近にあり、行き交うためにこの谷や大藪川に板の橋がかかっていたと考える人もいる。3.4.3参照。

シキノタニ（鋪^{しき}の谷）：22, 23林班界。大藪川の支流。「鋪」は鉱山の意。

上流部には1949年頃まで住友系の銅鉱山があった。3.4.3参照。

イナリノタニ（稲荷の谷）：24, 25林班界。大藪川の支流。広野には住居跡と見られる箇所が点在しており、過去には多くの人達が生活を営んでいたことが伺われる。居住者の中には信心深い者がいて、この谷の付近に稲荷の神を祀っていたと語る人がいる。

トウザダニ：26林班。大藪川の支流。

コウザキダニ：26林班。大藪川の支流。演習林外の下流に大藪集落の人達がコウザキという狩猟の神を祀っていたことから名が付けられた。今でも猟師が獣を取った際にコウザキ神に毛を供える習慣がある。イノシシであれば背中^{しん}の毛、シカであれば腹部の毛を用いる。

コウチガタニ：28林班。大藪川の支流。

林が大規模に伐採された際に飯場を構えていたと伝えられている。当時、この飯場での酒の席で大喧嘩がおこり、山師がけんか相手に斧で斬りつけられた。斬られた者は血まみれになりながら、水が欲しい、飲みたいと叫びてナガタニの川縁まで這っていき、水に頭をつけたまま死んだという。林道ができる以前は大木が鬱蒼と生い茂り不気味なところで、この方面での仕事には皆足が重かったと先輩職員達が語っていた。

ヒガシゴウ（東川）（旧）：19, 20, 21林班全域。昔から猟師達が方向を示す際に用いていた。大藪集落の言い伝えでは、集落の位置から太陽が昇る東方向にナガタニやジャダニがあることからこの名で呼ぶようになったという。ちなみに大藪集落にある「山川」という地名も同様に「やまごう」と読む。

栗の木デーラ：20, 21林班界の緩傾斜地。大規模な伐採が行われる以前はこの場所に通直な栗の木が密集していたといわれ、現在も数本の栗の木が見られる。

焼き畑跡：20, 26林班。ヒエの生育に非常に適しており、野地や大藪集落の先人達が競ってヒエを播いたと言われている。

山崎越：21林班と民有地との境界に位置した峠。明治後期から大正にかけて銅山で採掘された銅や、広野付近で伐られた材を旧南郷村神門方面へ搬出するために、広野から山崎越まではトロッコ道（馬に引かせる軌道）が、山崎越から神門まではカシ類の材で作ったそりに材木などを乗せて人力で引く道幅1.6m程の木馬（きんま）道が通じていた。

シャクナン越（旧）：21, 22林班界にある峠。21, 22林班界の比較的低い尾根に位置しており、銅山や広野から山崎越までの途中でトロッコはここで中休みをしたと言われている。トロッコ軌道は馬に引かせるため勾配を急にできないためこの位置に軌道が引かれたと思われる。ツクシシャクナゲが多く自生していることからシャクナゲが転じてシャクナンの地名が付けられたとされている。

ジャダニ越：21, 22林班界。大藪からジャダニを経て銅山や広野へ通じていた歩道にある峠。

水力製材所跡（旧）：21林班。大藪川とジャダニとの合流点付近。大規模伐採が行われたとき、ここに集材して、水力による製材が行われたと言われている。

御神の滝：21林班と民有地との境界。落差約30m。滝の淵沿いに山の神を祀ってあったことから、林道開設後に山の神は車道沿いへ移された。

ジキザシチ（直挿地）（旧）：21林班。地ごしらえで藪（当地区ではヤボと呼称）伐り後に火入れを行い、そばを植えて収穫（当地区では「そば作」と呼称）した後に、スギの挿穂を直接挿したことから呼ばれていた。

山の神：22林班。山の神の神事は、「山を守る」、「山の安全を祈る」といった意味で執り行われるとされている。大河内では1, 5, 9月の16日と決まっており、当演では9月16日以前に毎年神事を行っている。ちなみに山の神は女であると言われている。以前は22林班に小班にあったが、2004年の台風13号による土砂崩れで埋まったため、現在の場所に移された。

銅山：22, 23林班界付近。明治後半から昭和24年頃まで銅が採掘されたという。林道よりシキノタニの上流側約1kmの地点にあり、製錬所跡と見られる石垣や銅の鉱滓が現在も残っている。坑道跡と見られる穴もいくつか点在している。飯場の跡には焼酎瓶、陶器類、貝殻などが散乱していて当時が偲ばれる。

板乾場：23, 24, 25, 29林班の大藪川沿い。この範囲の川が蛇行するカーブの内側には

小さな平地が数カ所見られる。伐採現場（当地区では山床（やまとこ）と呼称）で木挽きをした板を人力で集めて乾燥させた場所であったという。

広野：24, 25林班にある大藪川沿いの緩傾斜地。大正時代後期に1955年植栽カラマツ造林地周辺で山火事が発生したという。風にあおられて三方岳の斜面を瞬く間に燃え上がり、きれいな焼け野原になり、ここ一面にみごとにススキが生い茂ったことから名が付いたとされている。

人焼き場：24林班。明治後期から良質木だけを伐る択伐労働者が現在の広野付近を住居地とし、生活を営んでいた。当時疫痢病などがはやり死者が多数でたため死体をまとめて薪で焼いた場所だという。

モチダ（餅田）（旧）：24林班。イヌツゲやヤマグルマなどの樹皮を剥ぎ、その皮をダツという竹で編んだ円筒の器に入れて半年から1年間程浸け置いて腐敗させるための水たまりや池をモチダと呼ぶ。1944年から1960年頃まで本演でも鳥もちの製造が行われていた。

グウロ越（旧）：28林班と民有地との境界。本郷集落と広野を結んでいた歩道にある峠。本郷から広野への歩道は古来から3本あったが、もっとも遠回りになるため最初に廃棄されたようである。本郷から丸野を経由してこの峠を越し、コウチガタニ沿いを下り、29林班の板乾場辺りを通して広野へつながっていたという。

横尾：28, 29林班界。演習林設立以前にコウヤマキの群落があったとされている。1996年の権葉らによる調査（権葉ほか、1995）でコウヤマキの古い切り株が多数確認された。

梅の木の前越：29, 30林班と民有地との境界点。本郷と広野を結んだ歩道にある峠。この歩道は演習林事務所から大河内八幡神社のそばを通り、ここから550mの標高差を一気に登る峠越しの道であった。峠には山の神が祀られ、行き交う度に御神酒やお供え物があげられていた。以前は事務所から広野方面への幹線歩道であり、演習林職員も1980年頃まで業務に利用していた。広野に人が住み栄えていた当時、大河内集落民との交流で最も人の往来が多かった道とされている。1983年に広野付近まで大藪方面からの林道が開設されると、この道はほとんど使われなくなった。

ジョウコシ（城越）：29林班と民有地との境界にある峠。本郷集落から城集落を通り、この峠を越してボウズダニ沿いに広野へ通じる歩道があった。1970年代後半まで使われていたが、前述の林道が広野まで開通したことに伴い、梅の木の元越歩道とともにその後ほとんど使われなくなった。

アオキデーラ：30林班。アラカワダニ沿にかなり広い平地があり、この付近に青木と言う伐採山師が住居を構えていた。青木小屋跡とも言う。石積みや陶器類の破片が残っている。

3.5 三方岳団地・丸十（32-37林班，図5）

3.5.1 山名

三角点野々首（国）：32, 33林班の頂点で民有地と接する。標高1356.6m。

三角点尾崎峠（国）：34, 35林班の頂点で民有地と接する。標高1224.3m。

3.5.2 谷，川名

アラカワダニ（荒河谷）：30, 31林班と32林班の境界。一ツ瀬川の支流。

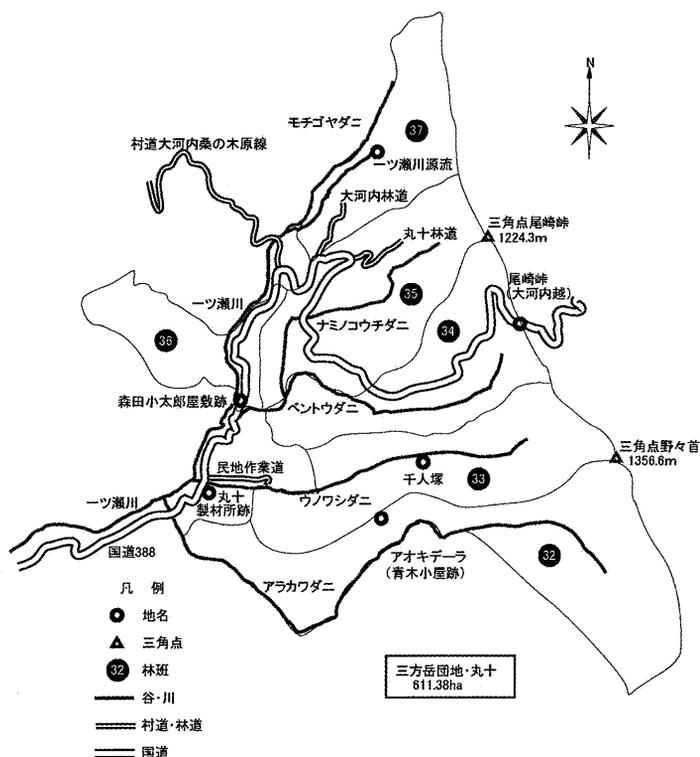


Fig.5 Geographic names of Maruju area
 図5 三方岳団地・丸十 (32-37林班) の地名

ウノワシダニ (鵜野鷺谷)：33林班。一ツ瀬川の支流。

ベントウダニ (弁当谷)：34林班。一ツ瀬川の支流。以前は大河内と上椎葉を結ぶ主要歩道がこの谷を横切るところで、行き交う人々がよく弁当を食べたのではとされている。

ナミノコウチダニ (浪の高知谷)：35林班。ベントウダニの支流。

一ツ瀬川：36, 37林班。一ツ瀬川本流の源頭の一つがある。

モチゴヤダニ (餅小屋谷)：37林班の一部と民有地との境界。一ツ瀬川の支流。鳥もち (当地区では単に「もち」と呼称) の原料となるイヌツゲやヤマグルマなどの樹皮を採取するために泊まり込みの小屋がけをしていたと言われている。

3.5.3 その他の地名

アオキデーラ：32林班。3.4.3参照。

千人塚：33林班、ウノワシダニ付近。広野で亡くなった人を焼き、その骨を千体程埋めた場所と言われている。

丸十：33～37林班周辺。国道388号線が通る鵜野鷺橋付近の平地になっている辺りをいう。演習林30～37林班周辺 (アラカワダニ流域以北で地形的にこの場所に搬出可能) から切り出された材を、水力を利用して丸鋸を回転させる方式で製材していた所で、その製材企業

名が「丸十」であったことからこの地名が付けられたと伝えられている。以後、周辺の民有地も含め、33～37林班全体をこの名で呼ぶようになり、演習林職員の旅行命令先もこの名で記されている。

大河内越（国）、尾崎峠：34林班界と民有地との境界。古来大河内と尾崎を結ぶ幹線歩道にある峠で、椎葉村榎尾にある郵便局から郵便物が行き交ったことからこの峠に通じる歩道は郵便歩道と言われてきた。昭和45年頃に車道を通じ、大河内越の名が広く使われるようになった。

森田小太郎屋敷跡：36林班。かつてこの周辺に約4 haの森林を所有していた森田小太郎という人が居住していた。昭和41年に林地を購入してほしい旨の申し出があり、本学が購入した林地である。

4. おわりに

宮崎演習林内の地名の総数は92であった。このうち山の地名が10個、沢の地名が35個、その他の地名が47個である。林班あたりの地名数は平均2.6個であったが、その数には林班によりばらつきがあり、8林班には地名が存在しなかった。地名が多く存在した18～26林班にはナガタニ、ジャダニ、大藪川といった比較的勾配が緩やかな川が含まれている。大河内の人々は川沿いの斜面に住居を構えることが多く、生活道路も川沿いを利用してきたため様々な活動が川を中心として行われ、結果として多くの地名が残ったのだろう。また宮崎演習林が設定される以前から銅の採掘や天然林の択伐、炭焼きなどが林内で行われてきた。これらの作業は同一場所での活動が長期に及ぶので、作業所周辺に多くの地名が付けられたと考えられる。

1955年から2007年までの間に宮崎演習林内で新たな地名は生じていない。名前が変更されたものも34林班の尾崎峠が大河内越に変更されたのみであった（国土地理院、1990）。50年以上地名がほとんど変わらなかったことは、一度名付けられた地名は変化しにくいことを示唆している。一方で演習林内で生活する人々がいなくなり、多数の人が絡む大きな行事や出来事が生じなかったために、新たな地名や名前の変化が生じていないと考えることもできる。本報告では過去に使われていたが現在は使われていない地名が25個あった。聞き取り調査の際に以前は確かに地名はあったが思い出せないとする回答も多く寄せられたことから、利用頻度の小さな場所では、過去に存在していた地名が消失した可能性が高い。年月の経過とともに大河内地区の植物方言が失われつつあるのと同様の傾向だと考えられる（内海ほか、2007；2008）。

本研究で報告した92の地名には当時の森林施業の様子や、人々の暮らしぶりを伺わせるものが多数認められた。地名はその地で生活した人々の存在証明でもある。地名とその由来を知ること、現時点の森林を見るだけではわかりにくい林の成立過程をより深く理解できることになるだろう。本報告を通じて演習林の歴史の一端を示す地名の保存が図られ、演習林管理運営の参考資料となれば幸いである。

謝 辞

調査にあたっては、椎葉村大字大河内矢立地区に在住の椎葉義實氏と椎葉博人氏、および同合戦原地区在住の坂本忠敏、房子夫婦に多大な御教示をいただいた。宮崎演習林技術専門職員の久保田勝義氏には資料の編集に際してご協力いただいた。心よりお礼申し上げます。

引 用 文 献

- 九州大学演習林九十年史編集委員会 (2002) : 九州大学演習林九十年史. 篠栗, pp35-36
九州大学宮崎演習林 (1939-) : 九州大学宮崎演習林造林台帳. 椎葉
九州大学宮崎演習林 (1989) : 宮崎演習林50年のあゆみ. 椎葉, pp22-30
椎葉村 (1994) : 椎葉村史. 椎葉, pp452-453
椎葉康喜・久保田勝義・鍛冶清弘・寺岡行雄 (1995) : コウヤマキ天然分布調査および人工植栽試験.
平成7年度九州大学演習林年報 : 18-20
内海泰弘・村田育恵・椎葉康喜・井上 晋 (2007) : 宮崎県椎葉村大河内における植物の伝統的名称およびその利用法I. 高木. 九州大学演習林報告88 : 45-56
内海泰弘・村田育恵・椎葉康喜・井上 晋 (2008) : 宮崎県椎葉村大河内における植物の伝統的名称およびその利用法II. 低木. 九州大学演習林報告89 : 51-62
(2008年10月20日受付 ; 2009年1月29日受理)

Summary

Shiiba Research Forest, Kyushu University Forest, Kyushu University was settled on Okawachi area of Shiiba village in 1939. Okawachi area was one of the center of Shiiba village and has a long history from Muromach Period. Number of geographical names in Shiiba Research Forest represent the history and these names are still used for research, education and forest management. This report describes not only the currently using geographical names but also the disappearing past names and their origin.

Key words : Shiiba Research Forest, geographical name, database, Okawachi